

alumni association of u-aizu. 会津大学同窓会 会報誌 第5号

◆ 同窓生を訪ねて

大学を成長させる同窓生
ネットワークのあり方

◆ データでみる会津大学

入試志願者推移から見た
会津大学の現状と課題

◆ 巻頭特集 座談会

「立場の違う7名が
会津大学の未来を
熱く語りつくす」

全入時代を生き残る大学のブランドを考える

目次

巻頭言	P2
巻頭特集 座談会	P3~6
大学の近況	P7,8
同窓生を訪ねて	P9,10
データで見る会津大学 ..	P11
同窓会事業報告	P12
- 決算・予算	P13
呼びかけ・編集後記	P14

世界を翻弄する金融恐慌、派遣切りなど
暗い話題が大きくニュースに取り上げられる一方で、
常に新しいベンチャーやテクノロジーが生まれ、
未だイノベーションの火が燦る IT 業界。

そんな状況の中、就職率は毎年ほぼ 100%を維持、
ベンチャー輩出数も公立大学ではトップを走り続け、
東北・会津において異彩を放ち続ける会津大学。

しかしそれは永遠のものなのか？

国公私大学が生き残りを賭けて全力で戦う全入時代、
持ち得る資産の棚卸しとその中で掬い上げた強み、
選択と集中によるブランドの再構築が求められる。

社会における大学の本当の価値とは？

それを問うべき時が来たのではないだろうか。



岩瀬 次郎 理事

日本 IBM にてアジア地区 SI 技術推進、ソフトウェアエンジニアリング部長など、一貫して IBM のシステム開発技術の策定、指導にあたる。IT スペシャリスト、プロジェクトマネージャなどの育成責任者。2007 年 4 月より会津大学に理事として赴任。現在は国際戦略本部、産学官連携など大学横断型プロジェクトを所管。米国 PMI 認定プロジェクトマネージャ、カーネギーメロン大学 SEI 認定 PSP/TSP ソフトウェア開発技術者・インストラクター。



吉岡 廉太郎 准教授

会津大学大学院開設時の 1 期生。博士号を取得後、特別研究員を経て講師となり現在に至る。研究分野は、プログラミング言語と開発環境、コンポーネント技術、ヒューマンコンピュータインタフェース。

外と中から見た会津大学のギャップ

前田：まず学生の方を中心にお聞きします。学生として大学に入る前と入った後の印象はどうでした？

松永：英語教育が盛んと聞いていたのですが、実際に入ってみると、それほど英語を使わなければいけない状況には追い込まれないことが分かりました。自分から積極的に学びにいかないとな身につかないのではと思います。

前田：高校の時はどんなことをやっていたのですか？

松永：普通の理数系高校でしたが、コンピュータには興味がありました。それまで自分で何かやっていたわけではありませんが、面白そうだということで会津大学を選びました。

吉岡：そのとき比較した大学はありますか？

松永：選択肢は少なかったです。その中でいい条件の大学だと思いました。

前田：今大学と並行して T&F カンパニーのスタッフとして働いているんですね。

松永：大学での勉強を活かしつつ、T&F では実践を通して学ばせていただいています。

前田：大学でやっていることと会社でやっていることとの違いはどのようにとらえていますか？

松永：大学では、学問的で基礎の部分を、T&F では直接即戦力となる技術をやっていると思います。

大塚：T&F に来てくれる学生は、やはり大学で学んでいる中で将来 SE になるイメージはありますが、SE が実際何をやるのかというイメージが持てていないので不安が多いのではないのでしょうか。そこを乗り越えてもらいたいですね。

就職活動における会津大学のブランド

前田：崔さんは今就職活動をしていますか？

崔：今院一年ですが、しています。

前田：会津大学というバックグラウンドを持っていると、就職活動ではどういった点でやりやすいですか？またやりにくいことはありますか？

崔：IT 系の会社に限られますが、皆さん結構ご存知で、自分が思っていた以上に名前は知られています。今までの先輩方に実績を作っていたというイメージがありますね。

前田：IT 系の分野ならばネームバリューがあると。

崔：そうですね。インターンシップに参加した企業をはじめ、複数の企業から『ぜひ弊社を受けてもらいたい』というようなお話を頂きました。特に IT 系の企業からのアピールが強かったように思います。あまり就職活動で苦労している感じはありません。

前田：インターンシップの期間と内容はどのような感じでした？

崔：情報系学生向けの募集で、内容はセキュリティの分野でした。期間は一週間です。

吉岡：自分が会津大学出身だと言うときに、どのくらい胸を張って言えますか？自信をもって言えます？

崔：自分としては言えたり言えなかったり、人事の方の反応は大体いい印象です。

岩瀬：人事の方が、会津大学を深く知っているということはあるですか？

崔：〇〇先生お元気ですか？のように聞いてこられる企業もいくつかありました。

前田：ちなみに就職活動中、OB か OG には会いましたか？

崔：直接お会いしたのは、会津にある大手メーカー勤務の方だけでした。

前田：単純計算で卒業生が三千人くらいはいると思いますが、大きい会社だとどこにいますか分からないですよね。あとは技術系だと、人事との関わりが薄いという場合もあると思いますし。

崔：卒業生の方に会ってみたいとは思いますが、接点を持つのは難しいのではと思います。

吉岡：大学側は卒業の時に名簿に記載するだけで、その後の追跡はしていないと思います。今までに同窓生からも大学院の学

生を募集しようとしたのですが、その時一番頼りになったのが同窓会の支部集会でした。

同窓生に対する大学の期待

前田：大学が同窓生に求めるものとしてはどういったものがあるのでしょうか？

吉岡：社会人からも入学希望者を募り、大学院の新しい専攻を作ろうとした際に、会社に行きながら、もしくは辞めてまで大学院に来る一般の方を探すのは難しいので、会津大学の同窓生にお願いしに行くのが最も有効でした。他には、パソコン甲子園のために同窓生を通して企業へ寄付をお願いしました。ただ、一期生でもまだ若く、管理職でも最初の段階に突入したばかりなので、決済などの権限がありません。そのためその会社にとってどんなメリットがあるのか、というストーリーを一から説明する必要はあります。いずれにせよ教育や研究の取り組みに対して学外からサポートがあればすごく心強いです。ただ、なかなかそういった同窓生を探し出せないというのが現状です。

渡辺：外部講師を集める時などに一番頼りたいのは同窓生なのですが、所在と連絡先がある程度把握できたらいいですね。

吉岡：プログラミング入門の講師として、毎年卒業生に話してもらっていますが、そのネットワークが広がると、選択肢も広がり、様々な方にお願ひできます。

前田：IT の大学だからこそ、FaceBook 的なものがあれば良いですね。同窓会としても、どうやってネットワーキングしていくかが課題です。ほとんどの同窓生は大学や後輩に対して『言ってもらえれば協力くらいするよ』という感覚はあるけれど、常に誰か困っていないかとかアンテナを張っているほどではないんです。だから、同窓生側にも何か具体的なメリットがあるとやりやすいと思います。例えばリクルーティングで自分の所属している企業に後輩を入れたい、共同研究をしたいとかです。ちなみに、同窓生のネットワークで言うと短大は四大にくらべ歴史があると思うのですが。

高橋：そうですね。卒業生でみれば8千人くらいいますが、短大全体の同窓会はあまり機能していません。ただし産業情報学科の同窓会は、短大で何かイベントがあるときに DM を打ったり、教員の退官の際のパーティーを催したりと、熱心ですね。

入試倍率低下と学生の傾向

前田：会津大学に優秀な学生が集まると、企業としてもそこに属する同窓生としてもメリットがあります。今後入ってくる人に対してどうアプローチするか、どういう人を集めるかも重要です。倍率が高ければ、大学としてはより優秀な学生を選ぶようになると思うのですが、どうでしょうか？

岩瀬：単純に倍率が高いということは、学生のレベルも高くなるということです。そうすると他の大学も含め院やドクターに行くパイプが太くなります。どうしても学力や適性の低い人に対するサポートなども考えると、全体の効率として優秀な学生が多いことに越したことはないでしょうね。『優秀』の定義はいろいろあると思いますが、偏差値だけではなくコンピュータへの適性も見ないといけないです。

吉岡：入試倍率が下がっているのに関連して、学生のモチベーションも段々下がっている気がするんです。何かを自分でやろうとする人の数が減っているとずっと感じていたのが、倍率の低下に無関係ではないと思います。さらに大学側も何も目的も持たずに入ってきた学生を、そのまま放置しているのではないのでしょうか？知識は与えていますが、持っているポテンシャルを全部引き出すことはまだしていないと思います。

そういう部分を同窓生に手伝ってほしいのですが、見返りとして提供できるものが、学生とのリンクや大学の現在の情報というものくらいしかありません。十年二十年後とはかく、今現在のメリットを考えるとなかなかスタートしづらいと思います。

岩瀬：『これからダウンと大きくなるから今のうちに投資して』というように、大学も企業のように見てもらえるといいですね。教育機関はトラディショナルというか、そう

いう風には見てもらえせんし。

前田：会津大はかなり IT に特化した大学なので、逆に入学してから肌が合わないとか、結局卒業後は IT と関係ない仕事をするというケースも起こります。その対策として、IT 以外のこともやりたい人向けのセーフティネットも必要ではないでしょうか。

周りの会社に聞いてみた会津大学の一歩の強みというのが、『IT の最も基礎的なリテラシーがある』という事です。ただしそれは企業として大きな投資になる新人研修のコストが抑えられるからという話で、それだけだとつまらないですね。だからまず普遍的で高水準の IT リテラシーがベースにありつつ、そのうえで特化した強みをどこに持つかだと思います。

僕個人としては、会津大学の IT がベースにあって、デザインなどで付加価値をつけていくというバランスのとおり方を行っているのですが、手段である IT と何かを組み合わせると強いと思います。以前高橋先生に教えて頂いたのですが、短大との単位の互換も申請すれば可能と知って、選択肢の一部として最初から呈示されていると、短大のほうが地域にも密着しているでしょうし、実践に近い授業なので、学生にとって幅が広がりいいのではないかと思います。

吉岡：IT 業界も成熟してきて、今の授業だけでは即戦力として厳しいと思いますよ。コミュニケーションとかデザイン力とかビジネスセンスとか、そういったところで乗り切っていかなければならないと思っています。

プラスアルファの定義

前田：例えばシステム開発だと、大きなものを作る時、仕事を切り分けて標準化すると思います。ただ仕事ではなく人が標準化されると、誰でもいいということになってしまう。会津大がそういった『誰でもいい』人材を供給しているとしたら、すごくもったいないですね。だからこそプラスアルファの部分を持つということは重要だと思います。

吉岡：その人の強みがただ単に小手先の技術だったら、パラダイムシフトが起きた時に先がなくなってしまう。大学で育てるべきなのは、一つのことを突き詰めることができる人。何かに熱中し、それに深く取り組んだ経験が、後で他のものに応用されたり、残るものであったりする。そういう捉え方をした上でのプラスアルファが欲しいです。

そこで気をつけなければいけないのが、本当にその子がそこに入り込んでいけるのかということ。大学として管理することです。ただ丸投げをしているだけでは、その子の興味を満足させているだけで教育とは言えないんじゃないでしょうか。

渡辺：確かに、中途半端だったらプラスアルファを持っていても役に立たないでしょうね。学生を見ていると、IT だけでなく英語が強いので、そこがかなり価値のあるプラスアルファだと思います。ただそれを学生がどこまで活かしているかですが。

前田：どこまで突き詰めてできるかは、テクノロジーもデザインも同じだと思います。理想を言えば、きっかけを与えれば、それを突き詰められる人を集めたいですね。僕が入った98年当時は、ワークステーションが並んで、あり得ないくらい恵まれた環境だったのが、今はハードやソフトが安くなり一般化されてきました。環境が一般とあまり変わらないのならば、人のほうが変わる必要があります。

岩瀬：プラスアルファとして応用力や実践力を求める企業と、コミュニケーションなどの基本力を求める企業とで違いますよね。大企業は新人教育をしっかりできるから、基本力がある人を採りたい。

会津大学の場合数学や物理は大丈夫でしょうが、人の話をきちんと理解しまとめるといった力が弱いのでしょうか。そこをSCCPなどを通し身に付けて欲しい。大学としてはそういった戦略でしょうし、うまく回ってくるといいですね。

大塚：企業としては、教育だけにコストを割くわけにはいきません。教えてばかりでは実践に入れないので、実践を通して学んでもらいます。基本となる技術は会社から教えるだけでなく、先輩の学生からも教えます。

会社に来てくれる学生を選ぶ際は、技術力の有無ではなく、本当にそれをやりたいと思うかどうかを非常に大切にしています。

チームで作業していく中で、やはり自分はこのほうが好きだ、というのが出てきます。話すことが苦手な子もいるので、こちらとしてはそれに気づかせてあげ、改善していくという形をとっています。自分はコードを書くのは合わないと思う学生や、マネジメントに興味を持つ学生もいると思います。そういうところがプラスアルファの部分になります。そういった目標に対し自分を変えていける能力は、実践を通して身につくものだと思います。

大学のブランドは社会へ出ていった人が作るものなので、学生の時に基礎をしっかり押さえた上で、企業で実践したという経験は大事です。『知っている』というだけでは誰もついて来ませんし、さらに自分で学び成長できる場を提供し、いい学生を輩出することが、企業として積極的に関わられる部分かなと思います。

上下の交わりや競争から学生を育てる

前田：先ほどの大塚さんの話で面白いなと思ったのが、企業内で大学の先輩が後輩に教えるということです。企業では人材教育は重要なので教え方などは通常仕組み化されています。

大学も先輩から後輩につながるコミュニティなので、そういうのがなんとなくでも仕組みになっているといいなと思います。そういった関係性をうまく学内で作るにはどうしたらいいのでしょうか？

吉岡：競争をもっとさせたほうがいいですね。大学内でのコンテストなどいいと思います。ベンチャーや同窓生など専門知識を持った人がお題を出してそれに学生がチャレンジする形を作り、到達点を管理するのはその管理が必要です。

何事もなく卒業していくとする大半の学生に刺激を与える場として、学生全員が参加するくらいのコンテストが欲しいですね。昔はそういう文化が自然にありました。新しい技術があったらとりあえず使ってみたり。今はそういった動きがないので環境を作ってあげるしかない。

渡辺：確かに、環境の中で自分が劇的に変わる瞬間ってあったんですよ。『あの人の会話でコードがいきなり書けるようになった。』というような気づきの機会が、少なくなってきたと思います。

前田：僕がいたときの会津大学の校風は

『DIY(Do It Yourself)』だったんです。環境が制限され、使いたいソフトがないので、じゃあ自分で作ろうという校風です。大塚：私が入ったところはオープンソースのソフトをいじったり勉強会を自分達で開いたりしていました。今 T&F ではプログラミングコンテストを内部でやっていて、学生がビジネスプランなりアプリなりを各自作って発表しているのですが、そういうものを外部に公開できる状況を作って、それで引っかかってくる人が増えたらいいなと思います。学生がここまでのものを作ったよと言うのを見て、イキのいい学生が来てくれれば。

前田：短大はよくコンペをしておられますよね。デザイン系だとネットにも情報が多いです。地域のちょっとしたポスターを作るというような話も来ると聞いたのですが、学生にはどのように話を振ったりしているのですか？

高橋：全国公募のコンペだとなかなか入賞できないので、短大生限定のものを数ヶ月に一回持ってきています。それで何人かのうち一人が採用されて商品化みたいな話になるといい形になりますし、負けても何回もやるっていうやる気ある子もいます。

前田：チャレンジするのに意味があるということで、コンペをうまく使って積極的に経験をつませるようにしているんですね。

高橋：そうですね。採用にならなくても、自分はこういう作品を作ってきました、というポートフォリオとして見せることができますし、作ったものは実績として残りますから。

吉岡：現在の教育のキーワードは、『自信』だと思うんです。昔の子は自信がありすぎるくらいだったんですが、今の子は控えめで自信がなさ過ぎる。鬱病や引きこもりになってしまふ子も少なくないです。コンテストなど何かしらを通して、自分の考えたものが作れたという成功体験を積んで欲しいです。

岩瀬：まず勉強してついていってもらうこと、自信をもってもらうこと、そして挫折してそこから立ち直ること。この3つを経験して社会に出ていって欲しいですね。道は遠いかもしいですけど。

前田：そのためにベンチャーや地域から小さなお題を持って来るというのはいいですね。ぜひ具体化できればと思います。

新しく入ってくる学生に向けて

前田：これから入学してくる人は取り組みを見て大学を選んでできますし、その情報発信がすごく大事だと思います。その上でどういう学生を採るかになりますが、以前角山学長とお話させていただいたときに、AO(一芸)入試を入れてはどうかと申し上げました。パソコン甲子園の成績優秀者は推薦枠がもらえるとのことで、そういう仕組みがもっと増えてくるといいですね。

岩瀬：入試の形態を見るとある意味特殊だと思います。かなり理数重視です。逆にIT系に特化したAO入試とはどのようなものでしょうか？

前田：例えばですけど、パソコン甲子園への参加が評点に加えられるとか、技術に限らずベンチャーが課題を出して、それを解ける人を積極的に採るなどして欲しいですね。

高橋：資格推薦もありますよね。シスアドとか。

吉岡：飛び級の公募の案を考えていたときにAO入試のように、プログラミングの試験を行うというのがありました。

『プログラミングはできるけど、勉強はそうでもない子』を採るのか、『プログラミングには興味はないが勉強ができる子』を採るのかで、どちらも受け入れてしまう状況でした。それをやるくらいなら『プログラミングができる子』を採った方が、後々のことや大学のブランドを考えるといいのではないのでしょうか。

ベンチャーからお題を出すのは、入試としてはちょっと難しいですが、検討の余地はありますね。大学はそういった意見の必要性に気づいていると思います。

終わりに

前田：ありがとうございました。周りのベンチャーも色々なことをやっていますし、共通の基盤を作り大学に意見を出すとか、同窓生の話聞いてもらえる機会があるといいですね。

同窓会としても大学発ベンチャーとしても、色々やりたいことが出ました。今後も具体的な課題を共有し考え続けていくのが大事かと思っています。皆さん会津大学をさらに良くしていくためにも、今後ともよろしくお祈りします。



渡辺 孝信 助教授

千葉県印西市出身。平成14年会津大学コンピュータ理工学部を卒業後、株式会社ACCESSにて4年間勤務。その後、京都大学大学院経営管理教育部を経て平成21年会津大学産学イノベーションセンターに助教授として着任。現在に至る。



高橋 延昌 准教授

1996年筑波大学大学院修了。広告制作会社勤務を経て、2004年より会津大学短期大学部准教授。主に紙媒体を中心としたグラフィックツール制作やデザイン教育を通して地域や学会に関わる活動を行う。

前田 諭志

1998年会津大学入学。2005年株式会社デザインウム設立、代表に。2007年より会津大学同窓会理事。今回の座談会のファシリテーターを務める。



大塚 幸二

福島県出身。会津大学7期生。在学中はティーアンドエフカンパニーのスタッフとして働き、卒業後アクセントチュア・テクノロジー・ソリューションズに入社。2005年にティーアンドエフカンパニーに転職、学生スタッフのマネジメントを行う。



崔 裕仁

大学院・博士前期課程1年。京都府出身で京都韓国高等学校及び、ハードウェア学科を卒業。TA・情報センター・大学院教育推進室での業務に従事。



松永 百合貴

学部1年。宮城県出身で宮城野高校卒業。現在ティーアンドエフカンパニーのスタッフとして働く。

大学の近況

5 フィールド・9 トラック

新カリキュラム導入

学部2年生から研究室に配属され、その研究室ごとの指定されたトラックが学生に割り当てられます。実際にトラックごとの授業になるのは、学部3年生になってからになります。「IEEE」や「ACM」によって議論されてきたコンピュータ理工学分野の先導的カリキュラムであるCC2005(Computing Curricula 2005)をベースに、5フィールド(専門領域)とフィールドをさらに細分化した9トラック(履修領域)からなる新しいカリキュラムが導入されました。

コンピュータの基本原則を知りたい、コンピュータを設計してみたい、インターネットの仕組みを知りたいなど、学生の多様な好奇心に各フィールドが対応します。これにより、各自の興味や将来の職種に合わせて、独自のカリキュラムを組み立てていくことが可能になり、希望の進路の実現につながります。

フィールド名	トラック名
コンピュータサイエンス	コンピュータ・サイエンス基礎
	コンピュータシミュレーションモデリング
コンピュータシステム	コンピュータシステム設計
コンピュータ・ネットワークシステム	VLSI設計
応用情報工学	コンピュータ・ネットワークシステム
	バーチャルリアリティとヒューマンインターフェース
	ロボット工学と制御
	バイオメディカル情報技術
ソフトウェア・エンジニアリング	ソフトウェア・エンジニアリング

最先端のカリキュラムで溢れるアイデアをカタチにできる実力を養い、コンピュータ社会にさらなる進化をもたらす人材を育成します。卒業者はトラック終了認定が授与されます。

未来の起業家育成

「IT日新館」が卒業単位化

IT日新館は「工房型教育で起業を支援し、米シリコンバレーの精神を持つ日本のITの中核地域にしたい。」との思いから昨年度スタートしました。基本コースと、ベンチャー体験工房の2授業からなり、起業と学業を両立する後押しをするために、今年度から卒業単位に認められました。

IT日新館のベンチャー体験工房から「産学連携フェア2008inみやぎ」ポスターセッションに7テーマ出展しました。デモ機による動作展示、試作機の展示、NHK取材のビデオ放映等を含めて工房活動の成果をアピールでき、会津大学のブースは盛況を呈していました。

- 1) 組み込み製品や制御システムにおける機能安全
- 2) ユビキタス生態モニタと健康管理システム
- 3) 災害現場初期監視用ダイハードセンサネットワーク
- 4) フィールドサーバ活用アグリ応用モニタリング
- 5) コンピュータによるカム運動曲線創成システム
- 6) メッセージングネットワークを用いた次世代情報基盤
- 7) 機械学習による悪性WEBコードの分類

また、工房を履修する学生が説明を行いました。最初は、多少のぎこちなさがあったものの、展示の終盤にかけてはお客様へ積極的に声をかけて説明しており、学生のプレゼンスキルの向上も見られました。



大学で本格コーヒーが楽しめる

「花みずき」オープン

厚生棟1階の喫煙所となっていたスペースがなくなり、大学カフェ「花みずき」としてオープンしました。メニューはコーヒーが中心となっておりブレンドやカフェラテを取り扱っています。

○営業時間
平日: 10:00 ~ 17:00 定休日: 土・日・祝日
学生食堂 Rat-a-tat には朝食もあります。是非お越し下さい。



今年度で3回の開催 大学院集中講座

会津大学大学院集中講義が、3回開催されました。企業や国内外の大学から第一線の講師を招き、より実践的で国際的な授業を開講しています。卒業生の方でもお時間の都合がつかない方はぜひ受講を検討されてはいかがでしょうか。

第一回 2008/3 Intensive Courses

- ・ウェブサービス - 次世代型情報・サービスアクセス
Subhash Bhalla 教授
- ・JAVA 3D グラフィックス Gennadiy Nikishkov 教授
- ・意味情報検索 Vitaly Klyuev 上級准教授
- ・ニューロコンピューティングとその応用 Qiangfu Zhao 教授
- ・集積回路に対するコンピュータ支援設計 (CAD) 入門
齋藤 寛 准教授
- ・サウンドとオーディオ入門 Michael Cohen 教授
- ・音声解析におけるフリー・オープンソース・ソフトウェア
Ian Wilson 上級准教授

第二回 2008/8 情報セキュリティウィーク

- ・Security&Privacy 石垣 良信氏
- ・Security Issues in IP Networking 加羅 淳氏
- ・Contingency Planning
for Secure Information Systems スザンタ ヘラット氏



第三回 2009/3 次世代ソフトウェア開発プロセスウィーク

- ・TSP Executive Strategy Seminar
- ・Introduction to Personal Process
講師 秋山 義博氏、岩瀬 次郎 理事

大学生、大学院生、社会人、どなたでも参加することができ、それぞれの受講に伴い修了証が発行されます。受講料は基本的に無料(別途教材費がかかる場合あり)。第四回は夏ごろ開催を予定しており、日時が決定次第募集を開始します。近くなりましたら大学オフィシャルサイトや同窓会サイトに情報が掲載されますのでぜひチェックしてみてください。また、会津大学大学院では社会人大学院生として再びアカデミックな領域にチャレンジしたい方の募集を行っております。資料請求や制度など、大学院教育推進室までお気軽にご相談下さい。(it-intensive@u-aizu.ac.jp)

今年度のトピック 行事一覧

- 04.03 ローズハルマン工科大学のLaxer教授と学生4名を囲む懇談会
- 04.03 平成20年度入学式
- 05.09 大学カフェオープン
- 05.20 福島民報会津版に「会津大リレーエッセー」連載開始
- 05.26 会津大学留学生育成プログラム「国際IT日新館」が「アジア人財資金構想」に採択
- 06.02 野口英世アフリカ賞受賞者記念講演会・アフリカフェア開催
- 06.04 平成20年度公開講座スタート
- 06.04 京都外国語大学との学生交流情報交換会
- 06.04 四川省大地震被災者への募金活動
- 06.09 角山学長ら京都外国語大学を訪問
- 06.13 電気学会・電子回路研究会開催
- 07.02 京都外国語大学との学生交流
- 07.14 ACM国際大学対抗プログラミングコンテスト国内予選

- 07.14 視覚障害者向け講演会「音で聞く、手で触れるかぐやプロジェクト」開催
- 08.05 オープンキャンパス夏ステージ
- 08.08 コンピュータサイエンスサマーキャンプ会津大学2008
- 09.10 留学生のための「あいづ、まるごと体験事業」(高郷町編)
- 09.16 会津ITサマーフォーラム2008
- 09.26 角山学長ら東欧を訪問・ポーランド2大学と一般交流協定締結
- 09.30 平成20年度院秋季学位記授与式
- 10.03 平成20年度大学院秋季入学式
- 10.16 会津大学学園祭「蒼翔祭2008」
- 10.24 学部2年会田亘宏さん、自転車で日本一周
- 10.27 ACM/ICPCアジア地区予選会津大会 会津大学が4位
- 11.11 董冕雄さん、矢口勇一さんが日本学術振興会特別研究員に採用
- 11.11 パソコン甲子園2008

- 11.18 角山学長、ベトナム教育訓練省副大臣と会談
- 11.28 学生の取り組みが各賞を受賞
- 12.04 福島県留学生日本語弁論大会で王詩洋さん(修士1年)が特別賞
- 12.18 ISGD2008、HC'2008、iED Japan 会津大学で開催
- 12.18 台湾から教育旅行 大学生と交流
- 12.22 外国人留学生にお米の贈呈
- 12.22 イアン・ウィルソン上級准教授「NHKテレビ英会話」講師に
- 01.09 ふくしま環境・エネルギーフェア2008に出展
- 01.09 ACM国際大学対抗プログラミングコンテスト決勝戦へ出場
- 01.15 「福島県内合同企業説明会2010」
- 01.19 留学生地域交流「あいづ、まるごと体験事業」クロスカントリーに挑戦
- 01.23 先端情報科学研究センター(CAIST) 開設を発表



<お相手>

山崎泰宏(4期生)

1977年北海道生まれ。1996年会津大学入学。友人たちとneoclassic、Scheme of Entertainmentという団体を結成、会津若松市市政百周年記念イベントやうつくしま未来博へ3Dゲームやメディアアート作品を出展する。研究は公園先生の下でARをテーマに取り組む。

大学院を卒業後会社の運営や経営の勉強のため東京の某大手システム開発会社に入社。技術開発、企画提案、プロジェクト管理、コンサルティング等に5年間従事し独立。

「株式会社あくしゅ(axsh co.,LTD.)」を設立し、代表取締役。再結集した高校や大学の仲間10名と共に毎日楽しく工作中。いつか会津にデータセンターを作ろうと画策中。

座右の銘は、「人生省エネ」。
ブログURL:
<http://blog.livedoor.jp/sparklegate/>

「ネットワーク」とは何かを成しとげた集団意識である

前田: お久しぶりです、今日はよろしくお願ひします。

このインタビューの大まかなトピックとして、現在会津大学が抱える課題の解決のためにOB/OGのネットワークが重要な役割を果たすべきではないかという仮説のもと、大学に関わる人達がどういった行動を取るべきで、全体としてはどのようなアクションが可能かを意見交換させて頂きたいと思っています。

まず、有名な大学は特にそうですが、いわゆる大学の強みってOB/OGのネットワークにある部分小さくないじゃないですか。大学から出た人が社会のいろんなポジションにいるからこそ、いい意味で後輩に様々な機会を提供できますよね。

歴史の浅い会津大学でも12期生以上が社会に出ているので3000人くらいいるはずなんですが、まったくネットワーキングされてない、ほとんど個人的なつながりしか残ってなくてすごもったいないなと。

山崎: 大学を卒業するのと同様に、企業でも転職していくとネットワークができてくる。特にコンサル系はそういうの強いですね。でも、どちらもそうだけど、それは組織の外に出てから始めてやることではないかなと思う。大学生であれば、在学中にやるべきでしょう。

前田: 僕もそのネットワークの構築自体が目的ではなくあくまで活動ありきだと思います。具体的には大学に対して「社会」側からのリクエストを出すとか、学生から目指す企業で働く先輩を紹介して欲しいというような依頼を取り次ぐ窓口になればいいと思います。ただ、おっしゃる通り社会に出たらいきなり意識が切り替わるわけではないし、かといって在学中にそこまで考えてネットワークを作るわけでもないと思います。

山崎: 僕が言いたいのは、ネットワークがで

きるというのは、結局一緒に何かを成したという集団意識の形成なわけですね。だから逆に何も成さなかった集団がネットワーク化される意義は何であろうか、ということですね。

学生時代、いろいろなプロジェクトを一緒にやったから前田くんとはこうしてつながりがあるわけで、これが「ネットワーク」ですよ。それは同じ大学を出たから同窓生だね、という枠組みよりも強い。本当のソーシャルなネットワークとはやはり何かを共にした、今も共有しているメンバーのことを言うのではないのでしょうか。

前田: なるほど、非常に本質的な意見ですね。

山崎: 今の学生に言いたいのは、まず今後の自分たちのために今からネットワーク作りを意識して行動するべきだということです。

大学を中心としたネットワークの広がり方と現状

前田: 大学から社会へ出た後は外へ外へとネットワークの枝は広がっても、大学を根とした幹を形成する内なるネットワークが育たないというのは何かしなくてはと思っています。

先にも述べたようにその循環が大学のブランドを育てるわけで、どこかで母校や先輩とつながりたいと思ってもそういう枝がない、あるいはクモの糸のように細く漂っていて意識してもなかなか見ることができない。

人づてに聞けばユニークな企業に入った人有名なサービスに関わったりしている人もかなりいるようなのですが、ほとんど知られていないですし、同じ業界にいてもそこでちょっとした話を聞く機会すら無いんですね。

山崎: 現在の会津大学の状況というのも全く見えてこないですね。大学って今どう

なってるの?相変わらずなの?マイケル(コーエン先生)が相変わらずなのは知っているけど(笑)。そもそもそういう情報すら入ってこないんですよ。

前田: コーエン先生のお茶目さは昔から変わってないと思います(笑)。データで言えば全入時代の流れもあってか志願倍率が下がっているとか、起業する学生が減っているとか。それに対する起業家育成のプログラムはやっていますけど。

山崎: 大学の中でそういう勉強しないよね、経営とか会計とか。コンピュータだけやっていけばよい。それが当たり前の状態で、起業者が少ない、じゃあ起業する方法を教えよう、ってそんな短絡的な話じゃないと思う。あと希望者が減っているのはさほど大きな問題ではないんじゃないだろうか。代わりに質を上げれば良いわけだから。

現役生に「失敗させる」というかかわり方

前田: 僕はうちの会社で働くインターン生に対してテクノロジーは手段でしかないと言っていて、起業するかどうかよりもとにかく自分でサービスや何かを作っている人がどのくらいいるのか、それが大事だと思っています。そういった絶対的な質を上げるには大学の仕組みの中からの動きでなかなか難しいと思うので外から働きかけた方がいいですね。それには同じ通過点を先に通った先輩から、さらに言いたい人から言うべきだと思っています。

山崎: 確かに。ただ、問題に直面しないと分からないと思います。先輩がいくらあれこれ言っても結局当事者として行動できないと意味がない。大学生って4年間もあるわけだから、全員一度は起業なりサービスを作るなりして、それで失敗したらいいと思います。

前田: なるほど、インターネットサービスはリスクもほとんど無いですし、小さな失敗を山のようにさせる大学になれば学生の成長という意味ではすごく理想的な環境だと思いますね。

山崎: 要するに失敗って言わずにそれをゴールにすればいいんじゃないですか。それに学生にとって失敗は失敗だと認識できな

くてもいいし、次にもっとうまくやるには、という考え方でいい。そのために小規模な基金を作るとかどうでしょう。もちろん基金があるから起業しなさいというのは本末転倒ですが。

前田: 小規模な投資でもいいですね。1口2万円から。社会に出る前の小さな失敗の一つになればいいし、就職面接で投資を受けたことがあるって言えば箔が付きそう(笑)。ベンチャーではよくある、現物支給や場所の提供でもいいと思いますし。

失敗を否定せず、遊び感覚で始められる後押しを

山崎: 投資とかおおげさに構えず、もう遊び感覚でいいと思うんですよ。そうじゃなければ失敗が重くなってきて、それを恐れると何もできなくなる、一步を踏み出せない。

ラフな雰囲気飲み会の勢いで「それいいね!」くらいのレベルでまずプレゼンテーションする。賛同者がまともなれば、バイトにしては大きいけど事業としては小さすぎる数十万を手にして、その額以上の成果を目指す。イメージは欽ちゃんの仮装大賞。報告会もイベントにする。お金を出せるのは先輩と会津に関係する人達だけ。

本当にやるなら「これはお金をドブに捨てて楽しむ道楽です」と明言するべき。遊びの場だから楽しくやれ、文句は言わず前向きな答えを出せ。先輩へのアドバイス一言2万円って書いたっていいじゃないですか。アドバイスしたくてウズウズしたらお金を払ってください、ってすごい道楽だけど気持ちそんな感じ。そのくらいの人じゃないと大学に関わりたなんて言わないと思う。逆にそういう学生を媒介に想いの強いOB/OGのネットワークができるのであればそれは面白い。

前田: うまく行かなかつたら飲み屋で肩をバン!と叩いて「じゃあまたな!次のアイデア考えとけよ!」っていうくらいいいですね。今の学生を見ているとみんなすごく真面目でいい子なんですよ。起業なんて好きなことやって儲けたいというのが最も分かりやすい動機なわけで(笑)、そのためにはもっと楽をしろ、悪さをしろ、失敗をしろ、と。

山崎: とりあえず否定したらダメでしょう。そ

れは大人の悪知恵。成功か失敗かを判定する必要はないし、それでやめることもない。そうして何となく始まっていつの間にか会社になっちゃったら大学にとっては実績としてこんなラッキーなことはないですよ。

お金はテクノロジーと同じで手段の一つでしかないわけですが、会津大学が地域の発展のためだとすれば、やはりそれは必要でしょう。会津や後輩に何かを提供してみようかなと思った先輩がいて、つながった後輩が始めたことがちょっとうまくいったら報告や仕事をもらいに来たりする。うまく行かなくても一緒に飲む関係は続く。そうやってネットワークがメンテナンスされればいいんじゃないですか。

前田: 会津大学は元々カリキュラムも環境も教授陣も先鋭的で非常にエッジの立った大学でした。その原点に立ち戻り、大学から広がる/広げるネットワークの在り方を考える段階に来ていると感じました。また定期的に意見交換させて頂きながら今後の具体的なアクションにつなげたいと思います。本日はどうもありがとうございました。



<聞き手>

前田諭志(6期生)

1979年11月16日香川県生まれ。1998年会津大学入学後任意団体としてのデザインウムを立ち上げる。フルCGによる映画製作と並行して大学周辺のベンチャーで働き、2005年デザインウムを法人化、代表に。事業ドメインと地域、デザインとテクノロジーにおけるバランスを考えながら、個人のアイデンティティに関わるサービスを立ち上げる。

データで見る会津大学

学部卒業生の進路別推移

進路/年度	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
民間	112	113	123	135	135	110	132	136	137	
教員	3	1	3	1	4	7	5	7	10	2
公務員	3	0	9	3	0	3	3	1	0	0
大学院	44	41	67	52	67	69	56	45	44	50
他の大学院	4	6	2	3	4	4	6	10	9	4
海外の大学院	0	0	0	0	1	0	0	5	0	0
研究生	3	3	0	1	3					
起業	0	0	2	1	0	1	0	1	0	0
家業	2	0	1	2	1	1	1	0	0	0
その他	0	0	0	2	2	15	12	5	3	0
合計	171	164	207	200	217	210	215	206	202	193

大学院卒業生の進路別推移

進路/年度	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
民間	39	34	40	43	46	47	60	60	5	45
教員	0	0	1	0	0	0	1	2	0	0
公務員	1	1	1	0	2	0	0	0	5	0
大学院	10	6	7	8	9	9	8	4	0	6
他の大学院	1	1	0	0	0	0	2	1	0	0
海外の大学院	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
研究生	1	0	0	0	0					
起業	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
家業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
その他	0	0	0	2	1	4	3	1	3	0
合計	52	42	49	53	58	60	75	68	13	52

県内就職率の低下が課題

右の表とグラフは、会津大学の学部・大学院卒業生の県内就職率を示しています。ここ年々減少していることがわかります。2007年に関しては、9割を超える学生が他県で就職していることとなります。

県内の求人が年々少なくなっているかを調べると、2007年の新規求人倍率（新規求人数÷新規求職者数）は1.30と、過去5年間前年度より上昇し続けています。一概に求人がないから就職者がいないというわけではないようです。しかし、新規求職者数の減少もわずかながらあるため、大学だけの問題ではなく、福島県の魅力低下にも原因があるようです。

また、在学者数の約半分が県内出身と年々増加していることもあり、県内就職者を増やすことは、より地域に根付いた大学を目指すうえでも大きな課題となりそうです。

志願者増のための大学のブランド再構築を

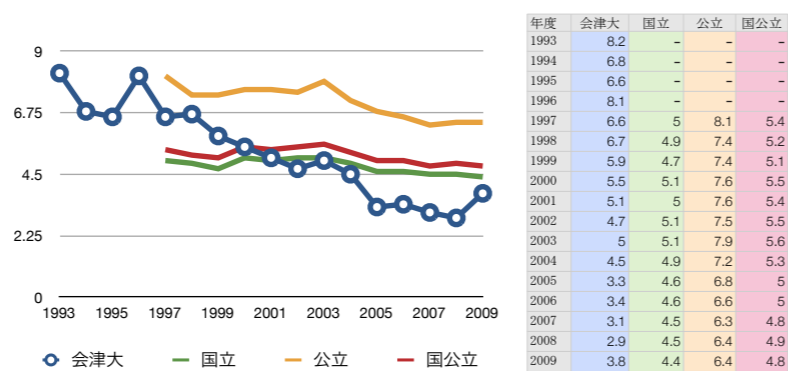
下の表とグラフは、会津大学の一般選抜（前期）入試における志願倍率の推移です。全国の国公立との比較も掲載してあります。年々減少していることがわかります。

ところが2009年は全国平均近くまで急上昇しています。公立学校で単科大学であるため、募集定員は元々多くありません。そのため一時的に志願者が増え戻ったとも考えられます。

国公立の志願倍率が過去最低になった2007年には、私立大学の志願者に伸びが見られました。これは大学全入時代目前とのことで、私立大学に入りやすい印象を与えたからと考えられます。今年になって不況のためか、難関私立大学を中心に志願者の減少傾向が見られました。ところが偏差値ランクが少し下の私立大学に人気が集まり国公立全体の志願者増加にはつながりませんでした。

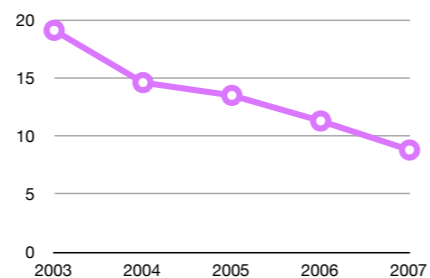
会津大学は、公立大学の平均志願倍率に対してまだまだ差があります。コンピュータ理工学部として、大学全体として、認知度向上のためのイメージ戦略を考える必要があり、延いては会津大学に入るとどう成長でき、どんな道に進めるのかと言った出口として、今一度会津大学としてのブランドになりうる強みや価値を見直す必要がありそうです。そのためには社会に出て行った同窓生との関係性が不可欠で、社会や企業と大学の連携が強化され優秀な学生が集まることで結果的にお互いメリットがある形につながっていくのではないのでしょうか。

入試志願倍率における国公立大との比較と推移



学部・大学院卒業 県内就職率の推移

県内就職者割合	2003	2004	2005	2006	2007
学部（民間）	110	132	132	136	137
学部（県内）	21	5	18	15	11
学部（割合）	19.10%	18.90%	13.60%	11.00%	8.00%
院（民間）	47	60	60	5	45
院（県内）	10	3	8	1	5
院（割合）	21.30%	5.00%	13.30%	20.00%	11.10%
合計（民間）	157	192	192	141	182
合計（県内）	31	28	26	16	16
合計（割合）	19.70%	14.60%	13.50%	11.30%	8.80%



同窓会事業報告

総会報告

平成20年10月11日（土）、会津大学研究棟S1講義室にて平成20年度会津大学同窓会総会が開催されました。前年度の事業計画及び決算の承認、今年度の事業計画及び予算の承認が滞りなく行われました。総会は例年通り会津大学の学園祭に日程を合わせ、終了後「櫛」にて父兄会との懇親会を行いました。



平成20年度 事業報告

1. **ウェブサイト**：同窓会ウェブサイトとして発信すべき情報の在り方の議論を重ね、同窓生同士のネットワーキングを強化するための機能とコンテンツ強化を軸に、次年度以降の本格的な動きに向けての体制づくりを開始しました。

2. **同窓会会報誌**：「読んでもらえる会報」との基本的考えに基づき、読んだ人の感想と世の様々な出版物を参考にこれまでの会報を見直しました。母校への興味を喚起するような取材中心の記事



作りを行い、デザインも刷新しました。

3. **交流会**：会津支部、仙台支部で同窓生交流会が企画・開催されました。複数の要因が重なり、東京支部、大阪支部での交流会は延期となり、定期開催と運営側の負担軽減、連絡や協力体制の構築に課題を残す結果となりました。

事業計画

理念「出会いから感動を」

我々の第二の故郷である会津での出会いをきっかけとして、価値ある人のつながり、新たな出会いを創造する。

目標「価値創造」

同窓生、および学生時代の関係者の交流、親睦を活性化し、お互いの利益となるための様々な機会を創設し、「価値創造」が出来る同窓会を運営する。

活動指針

「一、つながり」

同窓生、在校生、教職員をつなぐ同窓会
「二、継承-先輩から後輩へ」
建学の精神を次代へ伝える同窓会

「三、若い力」

大学と共に成長を続ける同窓会

○事業内容

◆会報誌の発行（平成16年度より継続）
会津大学や同窓生の近況を伝えることを

目的として、会報誌を発行する。

（平成16年度より、年一回発行）

◆会津大学同窓会サイトの運営
（平成16年度より継続）

同窓会組織、ならびに同窓会事業に対する理解を深めてもらい、様々な活動への参加を促進する為に、同窓生をターゲットとしたサイトの運営を行う。

また、今後は、同サイト上に同窓会理事会の活動状況（理事会議事録など）も公開していく。（平成16年度事業として開設済み、<http://www.u-aizuob.info/>）

◆同窓生懇親会・交流会の開催（平成18年度より継続）

同窓生の再開の場を交流会により提供する。総会と合わせた懇親会の他に、各支部単位での交流会など遠く離れた同窓生も気軽に参加できる場の実現を目指す。（平成19年度、各支部にて開催。）

◆会津大学事業活動の支援

平成18年、独立行政法人として新たな道を歩みだした母校会津大学の様々な活動に対する支援・協力。

◆理事会・総会の定期開催

理事会を2ヶ月に一度、場所を会津大学・東京を交互に定期開催する。理事会では、会運営全般に関する議論を行う。

総会は10月に開催される会津大学学園祭に併せて開催をし、主に、計画・予算に関する審議を行う。また、総会同日に後援会（父兄会）と合同で懇親会を開催する。

◆支部会の充実

支部会の会員への連絡機能を拡充することから、各支部任意に連絡員を配置する。また、支部独自の運営を促し、同窓会の活性化を図る。



平成 19 年度収支決算報告

【収入の部】 (単位：円)

科目	予算額	決算額	摘要
前期繰越金	4,206,062	4,206,062	平成18年度より繰越
会費	2,550,000	2,550,000	15期生255名×10,000円
雑収入	4,000	9,905	
合計	6,760,062	6,765,967	

【支出の部】 (単位：円)

科目	予算額	決算額	摘要
事業費	500,000	500,000	会報・HP委託費
交流会補助費	600,000	63,230	各支部交流会
雑費	70,000	51,295	事務用品、振込手数料、理事会会場使用料
管理費	20,000	17,430	サーバー使用料・ドメイン維持費
旅費	700,000	502,380	出席役員旅費等
郵送料	130,000	189,780	総会通知等
負担金	0	0	
予備費	300,000	14,400	慶弔費
合計	2,320,000	1,338,515	

【収支決算額】

収入総額 6,765,967 円
 支出総額 1,338,515 円
 繰越金 5,427,452 円



平成 20 年度収支決算報告

【収入の部】 (単位：円)

科目	本年度予算	前年度予算	増減	摘要
前期繰越金	5,427,452	4,206,062	1,221,390	平成19年度より繰越
会費	2,570,000	2,550,000	20,000	16期生257名×10,000円
雑収入	10,000	4,000	6,000	
合計	8,007,452	6,760,062	1,247,390	

【支出の部】 (単位：円)

科目	本年度予算	前年度予算	増減	摘要
事業費	500,000	500,000	0	会報・HP委託費
交流会補助費	600,000	600,000	0	
雑費	70,000	70,000	0	事務用品、振込手数料、理事会会場使用料
管理費	20,000	20,000	0	サーバー使用料・ドメイン維持費
旅費	700,000	700,000	0	理事会出席役員旅費等
郵送料	170,000	130,000	40,000	総会通知等
慶弔費	10,000	0	10,000	
予備費	250,000	300,000	-50,000	
合計	2,320,000	2,320,000	0	

【収支予算額】

収入予算額 8,007,452 円
 支出予算額 2,320,000 円
 繰越予算額 5,687,452 円

※科目間の流用は、理事会決議により可とする。

同窓会をきっかけに大学ともう一度関わってみませんか？

・同窓会会員として連絡先の登録をお願いします

来年度から「会津大学の今」を伝えるメールマガジンが、会員の皆様に送られます。

不定期発信になると思います。大学をより知ることで関わりやすくなります。

大学卒業時に登録を行っていない方や、住所などに変更があった方は登録をお願いします。

<登録方法>

- ①検索エンジンで『会津大学同窓会』で検索してください
- ②メインメニューから「会員情報登録」を選択します
- ③入力フォームよりご登録下さい

・大学や同窓会への要望をお寄せ下さい

- ・巻頭特集の座談会や OB インタビューに参加したい
- ・OB/OG として、大学にリクルーティングに行きたい
- ・シーズを持つ教授や研究室と共同研究・共同開発がしたい

<お問い合わせ先>

広報担当 前田 maeda@u-aizuob.info まで

編集後記

今回デザインをリニューアルしたのは、雑誌のようなデザインにし、より多くの方に気軽に読んでもらいたいという思いからです。経験がなかったためデザインに時間がかかってしまいました。言葉選びに関しても、なれない作業となり日本語は難しいなど、思えばかりでした。拙い文章が多いかと思いますが、楽しんでいただけたら幸いです。(ヨコ)

会津大学の同窓会の会報ということで、卒業後も会津にいる方には親しみやすく、会津を離れ様々な所で活躍されてる方にはちょっと懐かしくなるようなデザインにしようと思い、赤べこや磐梯山など会津らしいものを使いました。この会報を通して会津大学の今と昔を見て、何か感じるものがあればと思います。

(いる)